



複数回答

(注) 50歳未満の妻で予定子ども数が理想子ども数よりも少ない者に対する調査。

資料：厚生白書(平成10年版)39頁

国立社会保障・人口問題研究所「第11回出生動向基本調査」1997(平成9)年

図5 妻が理想の数の子どもを持とうとしない理由

か、子育てに伴う養育費や教育費などの大きな「経済的負担」がかかるにもかかわらず、実際には女性が子育てのため退職したり、正規就業からパートに変わることによって逆に家計の収入が大幅に減少することが多いからと述べている。

以上、厚生白書が指摘している出生力低下の要因は、多くの女性が結婚よりもむしろ職場で働くことに意欲をもち、結婚を先にのばして生活を楽しんでいること、および子育ては苦しく「経済的負担」が大きいと考えていることによると主張している。

人々は何故、結婚をうとましく思い、むしろ働くことに意欲をもつようになったのであろうか。林教授はこの問題の解明に取り組んでいる。

2) 林教授の主張の要約

前項で林教授の主張を説明したが、ここで再びその要点を簡潔に要約してみよう。

① 林教授は少子化の要因として「男中心社会の意識や制度が悪いために、女性は子どもを生まないのだという見方」が一般的であるがこれには疑問がある。

② 少子化の原因を物質的な条件から見では問題の一部しか扱えきれず、重要な他の原因をかくす結果となっている。林教授によると少子化の最

も重要な原因は現代の若い女性から、子育ては何物にも代え難い喜びであるという心理的な動機が薄れているところにあるという。

③ 「女性は働け」、「仕事を持って自立せよ」と煽られ、その考えに感染した女性には「子どもは負担だという感覚」が広がっている。この感覚の広がりこそが女性が子を生まない最も重要な原因だという。

④ さらに教授はこのような感覚の拡がりには「母性」を消失させてしまうと警告している。母性は誰にでも自動的に出てくるものではなく、本能としての母性さえ、必要な条件が整わないと、出て来ないものであると林教授は説いている。少子化の最も根本的な原因は母性そのものの消失なのである。

⑤ そこで少子化の危機から脱却するためには、母性本能を蘇えらせ、女性が子育てに喜びを感じる社会を作らなければならない。そのために必要なことは「働け」イデオロギーを反省しこれに打ち克つことがなによりも必要となる。

このような林教授の見解は事態の本質を見抜いた卓見であるといわなければならない。制度的不満や経済的理由よりはるかに深いところの人間行動を動機づける心理的要因に問題がひそんでいる